

故郷回帰の幻想 : Joseph Roth: "Der Leviathan"

著者名(日)	富山 典彦
雑誌名	埼玉医科大学進学課程紀要
巻	4
ページ	11-21
発行年	1986-06-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1386/00000074/

故郷回帰の幻想

—Joseph Roth: „Der Leviathan“—

富山典彦

日をのろう者が、これをのろうように。
レビヤタンを奮い起すに巧みな者が、
これをのろうように。

『ヨブ記』第三章八

神はいにしえからわたしの王であつて、
救いを世の中に行われた。

あなたはみ力をもつて海をわかち、
水の上の龍の頭を砕かれた。

あなたはレビヤタンの頭をくだき、
これを野の獣に与えてえじきとされた。

『詩篇』第七四篇一二—一四

その日、主は堅く大いなる強いつるぎで逃げるへびレビヤタン、曲
りくねるへびレビヤタンを罰し、また海における龍を殺される。

『イザヤ書』第二十七章一⁽¹⁾

この作品の表題となっているレビヤタンとは、聖書の中でしばしば言
及される、海に住む龍のような巨大な怪物のことである。ヘブライ語の

Leviathan を語源とし、もともとは「巻いたもの・とぐろを巻いた生き
物」というような意味であつた⁽²⁾。また、英語では「リヴァイアサン」と
読み、ホップスの同名の書物からもわかるように、「国家・政体」という
意味を派生している⁽³⁾。

さて、ヨーゼフ・ロートの『レビヤタン』*Der Leviathan* (一九四〇)
はロートの死の翌年にアムステルダムで出版されたが、その一部は『珊
瑚商人』*Der Korallenhändler* という題名で、一九三四年にパリで発
表されている。この一九三四年という年は、ヒトラーがドイツの政権を
掌握した一九三三年の翌年であり、またロートが祖国を捨てて亡命し
た一九三三年の翌年にあたる。また、この作品が出版された一九四〇年
は、ロートの死の翌年であるとともに、ナチス・ドイツが遂にヨーロッ
パ中を戦争に巻き込んだ一九三九年の翌年である。

ロートはウィーン大学の学生の時に第一次世界大戦を経験し、祖国オ
ーストリアのために従軍し、戦後復員してからは、文学研究者への道を
断念してジャーナリストとして活躍し、旅先のホテルやカフェのテーブ
ルで小説を書くようになる。一九二四年にベルリンで二つの長篇『サ
ヴォイ・ホテル』*Hotel Savoy* と『反抗』*Die Rebellion*—が出版され
て以来、ロートは意欲的に作家活動を開始するのである。

ローゼンフェルトの指摘によれば、ロートの作品の中から二つの大き
なテーマを取り出すことが出来る。一つは『ヨブ』*Hiob—Roman eines
einfachen Mannes* (一九三〇)を頂点とする、東欧ユダヤ人の生と運

命であり、もう一つは、ロートの代表作『ラデツキー行進曲』*Radetzky-marsch* (一九三二)において最も鮮烈に描き出される、オーストリア・ハンガリー二重帝国の崩壊と滅亡である。⁽⁴⁾

この二つのテーマに対立するものとして挙げられるのは、ロートの日記や手紙でしばしば言及され、そのエッセイ『アンチ・キリスト』*Anti-christ* (一九三四)⁽⁵⁾で鋭い警鐘が叩かれる、ナチス・ドイツとハリウッドのアメリカである。⁽⁵⁾特にファシズムに対しては、ロートはユダヤの危機としてのみならず、世界全体の、人間性そのものの危機として、早くから批判と攻撃を加えている。

東欧ユダヤ人とオーストリア帝国、それに対するナチス・ドイツと近代文明の象徴アメリカ、これらの諸要素がロートの意識の中でどのように位置付けられ、またそれが所謂両大戦間時代の諸問題と実際にどう関わっているのかといった問題が、私自身の当面の関心事であり、また今後の研究テーマである。先年、『ヨブ』とエッセイ『放浪のユダヤ人』*Juden auf Wanderschaft* (一九二七)との分析を試みた際、ごく大雑把にロートに関する諸問題の輪郭をスケッチしてみたが、もとよりそれに尽きるものではなく、またスケッチだけではそれぞれの問題の内的連関が不明のままであり、従ってそのスケッチは矛盾だらけにならざるを得ない。

本稿では、東欧ユダヤ人の生と運命を、『ヨブ』とは全く別の形で描いた短篇『レビヤタン』を分析することによって、これら諸問題の根底に潜む一つのテーマ——故郷喪失の問題——を考察したいと思う。

二

『ヨブ』と同様、聖書の世界とのつながりは表題の中ですでに暗示されているが、同時にまたそれはこの作品の背景が、ロート自身の生まれ故郷ブロディを想起させるものであることをも意味している。ただし、オーストリア領内ではなく、帝政ロシア領の一寒村として設定されている

が、その点もまた『ヨブ』をはじめとする一連の作品群と共通している。⁽⁷⁾この共通性はまた、敬虔な東欧ユダヤ人を主人公とし、メルヒェンのような雰囲気 작품을世界全体に醸し出す語り手の語り口にまで及んでいる。

スラブ世界とゲルマン世界との交錯する地点が、「東欧ユダヤ人の生と運命」を描く場として選ばれるのは理由のないことではない。この辺境の地は、西ヨーロッパ文明の発展からまだ取り残されており、それだけにユダヤ人の生の様相も昔と比べてさほど変貌していないのである。⁽⁸⁾一四九二年にスペインからすべてのユダヤ人が追放されて以来この地に住み着いた者も多いが、彼らは概ねここに「故郷」を見出していたと言える。政治的境界線がロシア帝国になろうとオーストリア帝国になろうと、或いはポーランドになろうと、自然の境界のないこの地方では、彼らにとつてずっと以前から住んできた場所が故郷なのであり、それは戦争や政治によって変わる祖国とは全く別のものなのである。

一見ヨーロッパの政治情勢からも歴史からも遠く隔たった所にあるように見えるこの地——『レビヤタン』ではブログロディと呼ばれる——は、勿論本当に歴史的時間の外にあるわけではなく、彼らの運命は確実にヨーロッパの歴史の奔流に呑み込まれている。ただそこに住む彼らの意識が、この奔流の実体を捉えていないのである。聖書の世界という言葉わば超時間的な世界とのつながりがこの地に見出されるのは、そこに住む彼らの意識がこの時代の歴史を捉えられないで、言わば無時間的な故郷(Heimat)を形成しているからにはかならない。しかし、旧約聖書がまたユダヤ民族の一つの歴史書であることを考えれば、彼らの故郷の無時間性もまた、歴史の流れから隔たっていることはあり得ない。ロートのストーリーテラーとしての才能は、この見かけ上は無時間的な故郷をメルヒェンのように描きながら、巧みに容赦のない歴史の中に組み込んでいくところにある。

ごく平凡なユダヤ人という主人公の性格設定が『ヨブ』の作品世界を構築する原動力になっていることは、すでに拙稿で論じたが、それに對

して『レビヤタン』の主人公ニッセン・ピクツェニクは、「全く特別な男」であり、本稿でこれから明らかにされるが、そのことがこの作品の世界を構築していく原動力となっているのである。

この主人公が他のユダヤ人とは違う全く別な存在であるのは、まず第一に、その商品である珊瑚と彼自身との特殊な関係による。「彼は商売を自分の居間でやっている、つまり、彼は珊瑚とともに暮らしている」⁽¹¹⁾のであり、普通の店のようにショーウィンドーもショーケースもなく、「この居間には、海底を思い出させる美しく神秘的薄闇が立ち籠めており、珊瑚がそこで取り引きされているのではなく、そこで育っているかのようなだった」⁽¹²⁾という記述は、珊瑚商人と珊瑚との奇妙な融和を示している。珊瑚商人は勿論珊瑚を売ることによって生活を成り立たせているわけだから、商品である珊瑚が大切なのは言うまでもないし、またその商品に愛着を感じるのも、それは商人としての「誠実さ」⁽¹³⁾の表われであるかもしれない。しかし、ここに示される愛着はやはり異常であり、「ニッセン・ピクツェニクにとって珊瑚は、それがのこぎりで挽かれ、切り刻まれ、磨かれ、選り分けられ、糸を通された後にも、まだ生きている」⁽¹⁴⁾という素朴な信仰の域にまで達している。しかもなおこの信仰は、「すべての水の根源でとぐろを巻いているレビヤタンに神自身がしばらくの間、即ちメシアの到来の時まで、大洋の動物や植物、特に珊瑚の保護を任された」⁽¹⁵⁾という一つの世界観をも創り上げている。この世界観がプログロディや近隣の村人たちにも影響を与え、彼らもまた素朴にそれを信じている。主人公の生と珊瑚との融和が、言わば一つの共同体を形造っているのである。

しかし、このことだけならば、主人公が全く特別な存在である根拠としては不十分である。もう一つは、「何か漠然とした郷愁 (Heimweh) が心にあった」⁽¹⁶⁾ことである。プログロディは大陸の奥深い所にあり、そこで生まれ育った主人公はこれまで海というものを見る機会もなかったが、珊瑚の故郷である海にずっと郷愁のような感情を抱き続けてきたのであった。生まれ育った土地が故郷であるとすれば、その土地を遠く離

れた時にその土地に対して抱く想いが郷愁であるから、主人公が海に対して郷愁を抱くということは言葉の普通の意味では正しくない。別の箇所でも語り手が「海への憧憬 (Sehnsucht)、珊瑚の故郷である海への憧憬を彼は心に抱いていた」⁽¹⁷⁾と述べているので、この郷愁 (Heimweh) を憧憬 (Sehnsucht) と言い換えれば、何も問題はないように見える。生まれて以来まだ一度も見なかったことのない海、自分が特別な愛着を感じ、世界観の根拠ともなっている珊瑚の故郷である海に憧れるのは、むしろ自然な心の動きであると考えられる。ところが、一方で彼は大きな海がある日ロシアを呑み込み、「彼が一度も行きたいと望まなかった海が彼の所にやって来た」⁽¹⁸⁾夢を見ている。主人公の海への憧れは、すでにそこに破滅を予感させるものを含んでいるのである。

『放浪のユダヤ人』の中でロート自身が述べる所によれば、「彼(＝東欧ユダヤ人)はアメリカを恐れているのではない、彼は大洋を恐れているのだ。彼は広大な土地を彷徨うことには慣れているが、海を渡ることには慣れていない」⁽¹⁹⁾とあり、一般的にはユダヤ人は海に対しては本能的な恐怖の念を抱いていると考えていいだろう。だから「レビヤタン」の主人公は『ヨブ』の主人公が『放浪のユダヤ人』で述べられる一般的なユダヤ人の特徴を殆んどそのまま引き継いでいるのに対し、海への憧れというただこの一点だけで、一般的なユダヤ人とは全く別な存在なのである。

しかも、ロートの作品における「水」の役割を考察したマグリスは、「水が死の要素であり、永遠性の、大洪水の混沌の要素である」⁽²⁰⁾ことを指摘している。この水の巨大な集積が海であり、『レビヤタン』でも結局はこの海が主人公の生命を呑み込む巨大な死として作用することになるが、主人公自身は意識していないとしても、海への憧憬とは言い換えれば死への憧憬なのである。ついにながら、珊瑚もまた、主人公が想像しているような海の生き物ではなく、無数の珊瑚虫の死骸の集まりなのである。主人公とその商品である珊瑚との奇妙な共生関係と、主人公の内面深く秘められた海への憧憬とが、主人公の生のバランスをとっている。こ

のバランスに動揺が生じ、遂にはバランスが崩れていく過程が、言わばこの作品の展開である。このバランスが保たれている間は「顧客は単なる顧客ではなく、ピクツェニクの家の訪問客であり」⁽²¹⁾、「農夫と商人、ユダヤ人とキリスト教徒との間には何の隔たりもなかった」⁽²²⁾という、一種のユートピア的状况が主人公の生きる故郷には存在していたのである。

このユートピアは、一つには、農民たちが珊瑚を必要とし欲しがっている現状と、ピクツェニクがその珊瑚に対する特殊な愛情によって「あたかも世界中に彼のほかに珊瑚商人がいまいかのよう」⁽²³⁾信用を得ていたことが、たまたま適合していたことによって支えられている。またもう一つには、主人公の生が珊瑚への愛と珊瑚の故郷への郷愁、言わばエロスとタナトスとの危うい均衡の上に置かれていたことが、このユートピアの基盤をなしているものであり、主人公の生の均衡と同様極めて脆弱な基盤と言わざるを得ない。

三

プログロディという故郷のユートピアには、その存立基盤の中にすでにその崩壊を引き起こす要素が含まれているが、具体的には主人公が人生で初めて経験する二つの出来事が直接の動機になっている。

一つは、プログロディ出身の若者で唯一人水兵になったコムローワの帰還である。「プログロディの人々は皆、若いコムローワが単にその馬鹿さ加減から危険な大洋に拉致されたものと確信していた」⁽²⁴⁾が、ピクツェニクだけは、内面に隠された海への憧憬の故に、この若者には奇妙に思われる質問を矢継ぎ早にするのである。そしてまた「彼は水兵のコムローワのお伽話のような話を熱心に満足してとてもよく耳を傾けて聞く」⁽²⁵⁾うちに、内面に抑えられていた憧れが「彼自身の生の表層へと突然到達した」⁽²⁶⁾ことに主人公自身驚かざるを得なくなる。

珊瑚の故郷への憧れを深層にしつつ、その表層ではこの世に二人とな

とが逆転するのである。それはまた、エロスとタナトスとの危うい均衡が壊れることを意味する。水兵の話聞くために飲んだ酒に酔い潰れて、彼は自分の歩いている道が海に流れ込む河だと錯覚するが、それは決して単なる錯覚ではなく、タナトスの奔流の予感であると解釈することが出来る。この流れに身を委ねてしまった主人公は、ユダヤ人としてこれまでずっと続けてきた朝と夕の祈りを怠り、更に、珊瑚の商いの季節になっても「ただぼんやりと、殆んど放心状態で、顧客にも商売にも関心を示さず」⁽²⁸⁾時を過ごしてしまう。

この主人公の変貌は、周囲の者、特に彼の妻にとっては余りにも唐突であり、理解することが出来ない。周囲の者の理解、特にいつも最も身近にいる妻の理解というものは、その人間の生の表層に関わるのが一般的であり、仮に深層への理解のまなざしが幸いにしてあったとしても、それは生の構造が安定している場合に限ったことで、生の深層に潜んでいた正体不明の憧れがある日突然噴出し、生の安定した構造を覆った場合には、到底理解の及ぶものではない。ピクツェニクの場合には、この憧れがタナトス、つまり死への衝動的願望に根ざしているから尚更である。彼自身もまたこのことを理解しているわけではなく、「ニッセン・ピクツェニクの内部では、見知らぬ、しかしそれなによく知っている声」⁽²⁹⁾が叫んだ。ピクツェニクは珊瑚の所に行く、彼は珊瑚の所へ行くのだ。珊瑚の故郷ヘニッセン・ピクツェニクは行く……⁽³⁰⁾という「声」を聞いたに過ぎない。この声は意識の深層から衝き上げてくる自分自身の声であり、人はその生涯にこの声を何度か聞くことがあるかもしれない。この声は、日常性の中に埋没している自分自身からは非常に遠い所から発せられる自己自身の声である。

日常という一見強固な地盤の上にわれわれ人間の生は置かれているが、ピクツェニクの場合は非常に単純な模型であり、大なり小なり幾つかの地層をこの地盤は形成している。社会情勢や戦争といった外部からのインパクトのみならず、この地層に含まれる断層や地下水脈のような内的危険がいつもこの日常という地盤を脅かしている。日常性の危機は、

視点を變えて見れば、地下の深い所に眠っていた自己自身が表面に踊り出る絶好の機会でもある。しかし、その危険を未然に察知したり、回避したりする理性をわれわれは具えている。或いは、地下水脈の水音を聞く感性を鈍らせていることも多い。『レビヤタン』の主人公は、この地下水脈の危険を知らず、それを回避しようとする意志を持たず、むしろ日常の中でこの隠れた地下水脈の水音を聞く感性を研ぎ澄ましていたのである。

主人公にとって、選択すべき道は一つしかない。「コムローワ青年に伴ってオデッサに行くという願い」⁽³¹⁾のままに、海を見に行くことである。海に行き、海を見て、それでどうなるかということは問題ではない。ロシアの大陸奥深くにあるプログロディに住む者にとって、海は限りなく遠い、言わば世界の果てにある何か恐ろしいものであり、この機会を逃したらもう二度と海を見えるというチャンスは巡って来ないかもしれない。日常に固執するのならば、たとえ海を見たいという願望が起こっても、実際に海を見に行くということにはなるまいが、内面の憧れが意識の表層を捉えてしまった主人公は、商売を捨ててでもこの衝動に従うのである。

オデッサに着いて初めて海を前にした主人公は、「大陸のプログロディ出身のニッセン・ピクツェニクではなく、全く新しい人間、言ってみればその内面が外部に迸り出たような人間、所謂方向転換した人間、大洋的なニッセン・ピクツェニク」⁽³²⁾となる。そしてこの海で「毎日何か新しいことを見聞」⁽³³⁾し、「ニッセン・ピクツェニクはオデッサの港で早くもプログロディの普通のユダヤ人の義務を忘れてしまった」⁽³⁴⁾のである。日常からの解放は、内面の憧憬の実現であり、古い自己の否定、新しい自己の獲得である。ユダヤ人としての自己も珊瑚商人としての自己も、ここではすっかり忘れられてしまう。主人公はここでは全く新しく生まれ変わった自己に出会うのである。

もしも、この作品がこれで終わりならば、この作品の持つ意味は全く違ったであろう。内面深く秘めてきた憧憬が、主人公を生まれ変わらせ

る……そういうモチーフをこの作品の中心に据えられたかもしれない。しかし、故郷のユートピアを破壊する直接の動機の一つが以上述べてきたことではあっても、もう一つの動機なしにはユートピアは壊れない。そしてそのもう一つの動機の方がずっと強烈に破壊力を発揮するのである。

四

エロスとタナトスとの危うい均衡の上にあった主人公の生が逆転しても、ただそれだけでは故郷のユートピアが崩壊しない所に、この作品の、メーテルヒエン的な色彩で描かれながらもなお色濃い現実性を見出すことが出来る。ユートピアを決定的に破壊するもう一つの動機とは、セルロイド製の珊瑚を売るラカトスという名の「悪魔」の出現である。この出現は、主人公が海からプログロディに帰って、「もう翌年の春のために計画を紡ぎ始めていた」⁽³⁵⁾矢先のことであった。もしもこの商売敵の突然の出現がなければ、主人公は翌年もまた春になり雪が消えたらすぐ海を見に出かけたであろうし、珊瑚商人としても、これまでのような形ではないとしても、何とかやっていったことであろう。

ラカトスの売る珊瑚は、アフリカのゴムの木の樹液から合成されるセルロイドによって作られているから、天然の珊瑚とは違って瑕ひとつなく、「重量は小さいけれどもその代わりその分だけ値段が安い」⁽³⁶⁾のである。顧客は当然のことながら、安くて美しく瑕のないものの方を選ぶであろう。ラカトスはピクツェニクに、このセルロイド製の珊瑚を売るように勧めるのである。

珊瑚に対して特別の愛情を持っていた主人公が、この偽物の珊瑚に手を出すとは信じられないが、「悪魔は誠実な珊瑚商人ニッセン・ピクツェニクに、本物の珊瑚の中に偽物を混ぜるという思いつきを与えた」⁽³⁷⁾のだ。本物の珊瑚と自分との関係を断ち切ることが出来ず、かといって利鞘の大きいセルロイド製の珊瑚にも少なからず心が動き、そして何よ

りも、このままでは顧客をすべてラカトスに奪われてしまうという恐れが、この苦肉の策を彼に授けたのだが、「これは偽物だけ売ったとしてもそれよりなお悪い」⁽³⁸⁾ことである。そして更に、「自分の金が増え、利子を生むという考え」⁽³⁹⁾に耽るに至っては、所謂強欲で人情のないユダヤ商人のイメージそのものでさえある。

この主人公の変貌をどう説明すべきだろうか。海を見ることによって全く生まれ変わった主人公と、セルロイド製の珊瑚に珊瑚商人としての良心を売り渡した主人公との間には、矛盾はあっても何の関係もないように見える。しかし、生まれ変わったピクツェニクというのは、エロスとタナトスとの均衡を失った存在であり、海への憧れというタナトスのエネルギーに翻弄されつつある人間である。タナトスの力が強くなる時、同時にまたエロスの力もそれにつれて大きくなるのが自然の勢いというものである。その証拠に、子供のいないことを少しも苦にしていなかった主人公が海を見た時初めて、「自分自身に子供のいないことが心に重く感じられた」⁽⁴⁰⁾のである。全体としては死への憧れが表面に出て彼を動かし始めているのだとしても、部分的には彼は彼の生への執着を、これまでには示さなかった形で示すのである。だから、セルロイド製の珊瑚への恐怖と嫌悪と驚きとが、逆にそれを利用して自らの生を拡大し、海への憧れをより積極的に充足するよう作用したとしても、それは矛盾と言うには当たらない。

もっとも、あくまでもそれは部分的に見た場合のことであって、偽物の珊瑚を本物に混ぜて売るという行為は、顧客に対する背信である以上に、永年特別の愛情を注ぎ続けた珊瑚に対する裏切りであり、また珊瑚との奇妙な融和の中に存在していた自己自身の否定である。この自己否定は、彼自身が意識的にそうしたものではなく、彼自身の素朴な生の決断が結果的にそれを導き出したに過ぎない。セルロイド製の珊瑚を、大量生産を可能にした近代科学技術の象徴と見るならば、本物の珊瑚を捨てて偽物に手を出すということは、近代科学技術文明の潮流に身を投げることであり、それ自体の善悪を問うことはまた別の問題であろう。⁽⁴¹⁾

っとも、ピクツェニクの場合には、「身を投げた」のではなく、期せずして潮流に足を取られ呑み込まれたのであるが、この主人公の姿に、時代の濁流に無意識のうちに加担しつつ自らも呑み込まれていく、無数の無名の善良で愚昧な「大衆」の影が重なり合っているのではないだろうか。

自ら意図して自己否定しようとした場合（それが可能かどうかは別にして、人は時としてそれを試みることがある）、そこには明らかに現体制の否定が含まれており、現体制の中でしか生きられない自己を否定することによって、新しい自己を獲得したいという願望がある。或いは、日常の中で殆んど意識されず、意味を喪失してしまった自己を再確認するという意味も含まれている。もっとも自己否定というからには、その程度のことでは済まない、もっと切迫した状況と内的自覚があることに違いないが、ピクツェニクの自己否定は、時代という切迫した状況のみがあって、内的自覚はなく、新しい自己への通路も結局は閉ざされてしまう。

この時代という切迫した状況は、単にセルロイド製の珊瑚の出現に象徴される近代文明という危機にのみあるのではない。「顧客がもう誰もニッセン・ピクツェニクの所に来なくなったが、彼はそのことを偽物の珊瑚ではなく厳しい冬のせいにしていた」⁽⁴²⁾という記述の中に巧みに隠された現実——ユダヤ人排斥——が見落とされてはならない。この作品では、さらに、ピクツェニクの売った偽物の珊瑚の首飾りした少女が、突然ジフテリアで死に、近隣の村でこの伝染病がはやったために、「ニッセン・ピクツェニクの珊瑚は病氣と死をとたらすという噂が広まった」⁽⁴³⁾ことがその原因であるかのように述べられている。そして、ラカトスの店が偽物だけ売っているにもかかわらず繁盛する一方、ピクツェニクはすべての顧客を失い、「夏には彼にキスをした農民たちが、あたかももう彼のことなど知らないかのように振舞った」⁽⁴⁴⁾のである。この事態は、あの故郷のユートピア、農民と商人、キリスト教徒とユダヤ人との融和状態の崩壊を意味する。

このユートピアがそれ自体すでに崩壊の可能性を孕んだ基盤の脆弱さを持ち、二つの直接的動機によって破壊されることをこれまで述べてき

だが、ここで一つの決定的な問題点を検討し直さなくてはならない。主人公自身の生が、エロスとタナトスとの均衡が破れたために破滅へと向かいつつあり、また、ラカトスという悪魔に唆されて偽物の珊瑚を売るようになったために、珊瑚商人としての自己が結果的に否定されたのだとしても、結局、伝染病の流行と不吉な噂という、ピクツエニク自身には責任のない、言わばある種の偶然がなければ、このユートピアの崩壊は最終的には成就しないのである。語り手は、一見単純で明快な作品世界を紡ぎ出す際に、本稿の分析で明らかにされた必然性の中に、巧みに偶然性を織り込んでいたのである。伝染病の流行もその結果起こる噂も、あたかもそれが偽物の珊瑚を売った主人公の行為の必然的帰結であるかのように語られているが、全く不幸な偶然としか言いようがない。偶然があたかも必然であるかのように機能する所に、この作品の語りの明晰性があり、また、現実というものの恐るべき一端を覗かせるロートの作品の特徴がある。つまり、現実というものは無数の個々の偶然的要素の巨大な集積であり、そこに生きる人間は、それらの中から意識的かつ無意識的に、自己の体験と想像力の及ぶ範囲で幾つかの要素を取り出し、そこに必然性を見出すことによって、自己と自己の置かれている現実とを抽象するのである。

この作品におけるこの偶然は、歴史的事実に照らした場合、もしかしたらユダヤ人排斥とその商店の破壊といったことに同定できるのかもしれない。しかし、ロートはこの作品世界をそういう歴史性から切り離した所に展開させることによって、かえって現実の巨大な不可解さを印象付けているようである。ピカートは『われわれ自身のなかのヒトラー』という書物の中で次のように述べている。「連関性喪失の状態は、単に個々の人間のなかに隠れている一個の個人的な事柄であるだけではなくて、個人の外部にもひとつの完全な、客観的な連関性喪失の世界が存在していたことを、われわれはすでに見てきた。それが人間のなかに存在していた時にはなんらの注意を払われることもなかったこの連関性喪失の状態が、いまや一つの巨大な現象のなかに集約されて立っていた。(中略)ドイツ

人は、まるで自分がこの現象に属しているかのように、そして、連関性の喪失が人間の本性でもあるかのように、この巨怪な現象とともに生きたのである。⁽⁴⁵⁾『レビヤタン』における故郷のユートピアの崩壊を最終的にもたらずものが、結局は偶然的要因であるとすれば、この作品世界はピカートの言う「連関性喪失の状態」にあると考えられる。ロートの創り上げた作品世界は一見するとこの連関性が容易に見出されると、それだけに多様な解釈可能性を持ったカフカの作品世界に比べると、ずっと底が浅くて簡単に読み飛ばすことが出来るように見える。しかし、それはやはりロートのストーリーテラーとしての巧妙な仕掛けとでも言うべきもので、決定的な点においてロートの作品世界も連関性は失われているのである。

五

故郷のユートピアの崩壊が、その成立基盤の中にすでに孕まれていた崩壊の必然性によるよりは、むしろ偶然的要因によるものであることが明らかにになったが、作品の結末における主人公の「唯一の故郷」への帰郷もまた、必然性をもつて起こるのかのように描かれた一連の出来事の中に巧みに織り込まれた偶然的帰結と考えることが出来る。

すべての顧客を失った主人公は、更に、道で滑って転んで倒れた妻をも失い、孤独になるが、「珊瑚とともにいると孤独だとは感じない」⁽⁴⁷⁾のである。すべてを失ってはじめて、彼は本来の自己を取り戻したかのようにさえ見える。「プログロディではなく、大洋が自分の故郷である」と、この時はつきりと自覚するのである。プログロディという故郷のユートピアは失われたが、しかし、それはもともと彼の本当の故郷ではなく、言わば故郷の幻想であったに過ぎない。珊瑚の故郷である海への憧れは、もはや単なる憧れではなく、「ある日生涯の決死の覚悟」を主人公にさせることになる。以前から「彼は世界には多くの海が存在していることを知ってはいたが、本当のそれともとの海は、アメリカに行くために渡らなくてはならない海である」⁽⁵⁰⁾と考えていた。そして今、セルロイド

製の珊瑚をすべて焼却し、「ニッセン・ピクツエニクにはもう長い間生き物のようには見えなくなっていた」⁽⁵¹⁾本物の珊瑚をトランクに詰めて、その海を彼は渡ろうとするのである。

ここでもうすでにこの作品の結末は察しがつく。この「ニッセン・ピクツエニクの故郷からの別れ」⁽⁵²⁾が、珊瑚の故郷への回帰、つまり死出の旅へと必然的につながっていく。しかし、ここでも、主人公の乗った船が沈没するという、滅多にない偶然の力を借りなければ、『ヨブ』の主人公と同じように新世界に到達したかもしれない。多くの乗客とともにピクツエニクは海に沈んで行けないかもしれない。

この結末部の語りのパースペクティブは、それまでとは全く異っている。

「奇跡によつて——とよく人は言うが——その時死を免れた人の話を信用するならば、ニッセン・ピクツエニクは救命ボートが満員になるよりずっと前に、甲板から水の中へと、彼の珊瑚の所へ、彼の本物の珊瑚の所へ身を投げたと報告しなくてはならない。

私に関して言えば、私はそれを心から信じたい。というものも、私はニッセン・ピクツエニクを知っていたからであり、彼が珊瑚の一族だったことと、大洋の底が彼の唯一の故郷だったことを請け合う」⁽⁵³⁾

ここで初めて語り手が一人称で登場し、それとともに主人公の最後の場面を「報告」という形で語っている。それまで語り手は主人公に密着しつつ、時には主人公の内面を明らかにし、また時には主人公の行為を解釈したが、一度も一人称の語り手として現われたことはなかった。肝腎の結末部において語り手が言わば神の位置から降りて、語られる対象と語り手との間に距離が生じたことは、少なからず重要な問題である。

まだ助かる可能性があったにもかかわらず自ら海に身を投げた主人公の行為は、海難事故という偶然を超えて、珊瑚の故郷に回帰するという彼自身の運命の必然を完遂しようとする意志の表現である。ただ、このことが、語り手自身の口を通して語られるのではなく、それを実際に目撃した生存者の報告として伝えられる所に問題がある。目撃者の証言で

あるから、そこには信憑性が付け加わることになるが、作品世界においてはこの信憑性は一種の確からしさに過ぎず、かえってある種の疑わしさが生じ、語られる対象の真実性が弱められることになる。そして、ここに至って語り手が一人称で顔を覗かせてしまったことによって、ここに語られたことがもはやそれまでの作品世界の現実から遠ざかってしまっていることを印象付けるのである。目撃者の口を通して語られたことを、語り手はただ信じているに過ぎない。目撃者の証言が本当であるとしても（恐らく本当なのだろうが）、作品世界というもう一つの現実の中では、語り手と語られた事との間に目撃者という第三者が介入することによって、語られた事の真実性をかえって曖昧にしてしまえばかりか、それまで一貫して語られてきた作品世界の現実に割れ目を生じさせることになる。もっともこの割れ目の故に、この作品は本来の現実への通路を開いており、この割れ目がなければもはや論じる価値のない作品で終わってしまったかもしれないのである。

ジークの解釈によれば、「ピクツエニクの国は海の底にしかない」が、そこでは生存する、(existieren)とは出来ない。一方、プログロディでは生存することは出来たが、言葉の本当の意味で生きる、(leben)ことは出来ない。海に自ら身を投げ入れたことは「この世界の解消であり従って救済であるが、同時にまた自己自身の解体である。ピクツエニクは彼自身の冥府に入っていくが、その代償として彼は自己の肉体を放棄する。死の中に彼は新しい故郷を、彼が入って行きたがっている新しい秩序を見る」⁽⁵⁴⁾。

もともとこの作品の主人公は、海への憧れという形の死の願望を持っていたのであり、その帰結として死の世界という新しい故郷に入っていくのも自然な成り行きであるから、このジークの解釈は大筋では正しい。しかし、結末部における語り手と語られた事実との微妙な距離を説明していない。この距離によって生じる作品世界の現実の割れ目に、この作品の結びの文が要求話法の接続法で挿入されている。「彼がそこで安らかにレビヤタンの傍らでメシヤ到来の時まで休らっています

ように。」——この要求話法の結びの文には、ロートの最後の作品『聖酔漢

伝説』*Die Legende vom heiligen Trinker* (一九三九)の結びの文——

「神様がわれわれすべてに、われわれ酔払いに、こんなに楽な美しい死を
与えて下さいますように」⁽⁵⁶⁾——の要求話法と似た響きがある。ジークはこ

の文に対しては「望みのない絶望の叫びである」と註釈している。

ぎりぎりまで追い詰められ、もはや行き場がないというロート自身の
現実が、この二つの作品には特に色濃く反映しているように思われる。

救いはもう死しかないという地点に立たされた人間が、本当に死を救い
と感ずることが出来るのかどうかかわからないが、作品の語り手たちの発
する要求話法は、安らかな死を求めて訴えている。『レビヤタン』の場合
は、この安らかな死が、新しい故郷の獲得、本当の故郷への回帰を意味
している。

死が故郷への回帰であるとすれば、生は永遠の故郷喪失の状況であ
る。プログロディは主人公の生まれ育った土地であり、ここにはユート
ピア的な故郷が存在したが、しかしそれは内的必然と外的偶然によつて
簡単に壊れるものであり、逆にまた主人公の内面の憧憬を抑圧するも
のである。この憧憬が一種の郷愁であったのは、生まれ育った土地が故
郷ではないという故郷喪失の状況に生が置かれていたからである。

古代に祖国を失い民族として離散を経験したユダヤ人は、言わば集合
的無意識において故郷喪失を体験している。故郷とはこの場合、過去に
おいて存在した一定の場所でさえあり得ず、故郷という概念はあっても
故郷そのものが存在しないからこそ、故郷喪失なのである。マグリス
は、エルンスト・ブロッホが「故郷を時間を超越した未来に求める一
方、ロートは故郷をまさに幼年時代の無時間性の中に看取している」⁽⁵⁸⁾と
言っているが、ロートの描く東欧ユダヤ人の生の無時間性こそ、この故
郷の幻想である。すでに述べたように、歴史から超越した無時間性など
どこにも存在し得ないから、この故郷は言わば蜃気楼であり、幻想なの
である。

ロートはまたその青年時代に、オーストリア—ハンガリー二重帝国の

崩壊を経験したが、これもまた故郷喪失の体験である。帝国は解体しこ
の地上から消滅することによって、一つの神話となる。この神話がロー
トにおいてどのように形成されてきたかということは、両大戦間時代の
諸問題とも併せて今後の課題としたい。

ロートの体験したもう一つの故郷喪失は、ナチス・ドイツからの亡命
である。一九三三年、つまり亡命の年にロートはこう書いている。「ドイ
ツの覇者であるプロイセンは、精神に対して、書物に対して、本の中の
本、即ち聖書に対して、ユダヤ人とキリスト教徒、フマニズムとヨー
ロッパに対していつも敵対的であった。ヒトラーの『第三帝国』は、プ
ロイセンがすでに目論んでいたこと、つまり焚書すること、ユダヤ人を
抹殺すること、そしてキリスト教を歪めることを完遂する大胆さを所有
したことでだけヨーロッパ世界を脅かしている」⁽⁵⁹⁾この六年後にロートは
絶望の末にパリで客死し、奇しくもその年にナチス・ドイツは世界を相
手取って戦争を始めるのである。この六年間の急速なヨーロッパ世界の
変貌と危機の増大に呼応して、第三の故郷喪失状態にあったロートの絶
望も深まっていく。この経緯を辿ることも私の今後の仕事にするつもり
だが、この絶望の崖のぎりぎりの所に位置する作品が『聖酔漢伝説』で
ありまたこの『レビヤタン』なのである。

この二つの作品に共通した結びの要求話法は、三重の故郷喪失を体験
した者の絶叫であり、生という現実においてはもはやどこにも故郷が見
出せなくなった者の嘆きの声である。この二つの作品の主人公たちは安
らかに死を得て、言わばそこに時間を超越した故郷を見出すが、それを
書いているロートは未だ生に縛られた永遠の故郷喪失者なのである。

(一九八五年九月九日受理)

注

ロートの著作からの引用は、*„Joseph Roth Werke“ Herausgegeben und
eingeleitet von Hermann Kesten. Kiepenheuer & Witsch 1976. (略号 JRW)*
による。

- (1) 聖書からの引用は日本聖書協会発行の『聖書』(一九七五年)による。
- (2) Vgl. „*Brockhaus-Wahrig Deutsches Wörterbuch in 6 Bänden.*“ Wiesbaden: Brockhaus; Stuttgart: DVA 1980-1984.
- (3) 中島文雄編『岩波英和大辞典』(岩波書店 一九七〇年)参照。
- (4) Vgl. Sidney Rosenfeld: „*»Hiob«—Globe und Heimat im Bild des Raumes*“. In: „*Joseph Roth und die Tradition.*“ Hrg. von David Bronsen, Darmstadt: Agora 1975. S. 227-240. S. 227.
- (5) Vgl. Reiner Frey: „*Kein Weg ins Freie.—Joseph Roths Amerika-bild.*“ Fankfurt am Main: Peter Lang 1983. S. 139 ff.
- (6) 拙稿「ヨーゼフ・ロートの『ヨブ』をめぐる——『放浪のユダヤ人』と民族共同体の幻想」『埼玉医科大学進学課程紀要第三号』一五頁—二五頁。一九八四年六月)参照。
- (7) ロートとスラブ世界との関係について論じた論文として、次のものがある。
 ① Roman S. Struc: „*Die slawische Welt im Werke Joseph Roths.*“ In: „*Joseph Roth und die Tradition.*“ S. 318-344.
- (8) ヨーロッパのユダヤ人にとって、一四九二年・一六四八年・一九三三年という年はきわめて重要な意味を持っている。一六四八年はポーランドとウクライナでボグロムが起こった年であり、一九三三年はナチスがドイツの政権を握った年である。ようやく安住の地を得たかと思うと、彼らは苛酷な迫害を受けるのであった。
- (9) ロートは „*Der Neue Tag*“ に載せた「国境」(*Die Grenze*) という短文(一九一九年八月七日付)の中で、次のようなことを述べている。
 「私の地理学の教授ヴァレンティン・ランゲンザック博士はいつも、二種類の境界線、つまり自然のそれと政治的なそれがあるとおっしゃっていた。(中略) 今や教授はおなくなりになって、確かに未だに政治的境界はあるが、もう自然の境界はなく、不自然のそれがある。」(JRW III-817)
- (10) JRW III-263.
- (11) JRW III-259.
- (12) JRW III-260.
- (13) JRW III-258. 彼はこの「誠実さ」によって近隣の村にまで名が聞こえ、多くの顧客を集めていた。
- (14) JRW III-260.
- (15) JRW III-261.
- (16) JRW III-262.
- (17) JRW III-265.
- (18) JRW III-263.
- (19) JRW III-347.
- (20) Claudio Magris: „*Der ostjüdische Odysseus.—Joseph Roth zwischen Kaiserium und Golus.*“ In: „*Joseph Roth und die Tradition.*“ S. 181-226. S. 190.
- (21) JRW III-264.
- (22) JRW III-265.
- (23) JRW III-260.
- (24) JRW III-265.
- (25) JRW III-266f.
- (26) JRW III-268.
- (27) JRW III-268.
- (28) JRW III-272.
- (29) 傍点は筆者。
- (30) JRW III-274.
- (31) JRW III-273.
- (32) JRW III-276.
- (33) JRW III-277.
- (34) JRW III-278.
- (35) JRW III-279.
- (36) JRW III-279f.
- (37) JRW III-282.
- (38) JRW III-282.
- (39) JRW III-282.
- (40) JRW III-278.
- (41) ロート自身は「アナクロニズムと評されるほどに、近代科学技術文明に対しては批判的であり、「古き良き時代」のドン・キホーテとさえ言える。

『レビヤタン』でセルロイド製の珊瑚をもたらすラカトスがハンガリー人であることは、ヴェルナー・ジークが指摘するように、ロートのこの批判的態度を明らかに示すものである。Vgl. Werner Sieg: „Zwischen Anachronismus und Fiktion.—Eine Untersuchung zum Werk von Joseph Roth.“ Bonn: Bouvier 1974. S. 141.

(42) JRW III-283.

(43) JRW III-283.

(44) JRW III-283.

(45) マックス・ピカート著・佐野利勝訳『われわれ自身のなかのヒトラー』（みすず書房「一九六五年」二三四—五頁。原著名 Max Picard: „Hitler in uns selbst.“ Dritte, vermehrte Auflage.

(46) JRW III-287.

(47) JRW III-284.

(48) JRW III-286.

(49) JRW III-286.

(50) JRW III-265.

(51) JRW III-264.

(52) JRW III-287.

(53) JRW III-287.

(54) Vgl. Werner Sieg: a. a. O. S. 75.

(55) JRW III-287.

(56) JRW III-257.

(57) Werner Sieg: a. a. O. S. 132.

(58) Claudio Magris: a. a. O. S. 190.

(59) Joseph Roth: „Berliner Saisonbericht.—Unbekannte Reportagen und journalistische Arbeiten 1920-39“. Herausgegeben und mit einem Vorwort von Klaus Westermann. Köln: Kiepenheuer & Witsch 1984. S. 383.